

東京二十区のTS亜人

ボカロ厨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

亜人世界から転生してきた原作知識なしオリ主が大切な人のために死んだり死ななかつたり頑張るお話。

亜人知らなくても読めます。

亜人は死んでも生き返る人間です。

目次

金木研の終わりと始まり

1

とある武器商人

19

金木研の終わりと始まり

上井大学で最もコスパが良い学食は何か？上井大学で最もうまい学食は何か？上井の学生がそう聞かれたなら全員がこう答えるだろう。うどんである、ノーマルなぶつかけうどんである。そう思うくらいこのうどんはうまいし安い。うまさに関して他の安価学食がまずいたため相対的にうどんが美味く思えるだけの話かもしれないが。別にうどん以外が全てまずいわけではない、定食系は少々値は張るがなかなかうまい。しかしコスパとうまさを両立できるのはやはりうどんだけであろう。上井大学一年の僕、金木研はそう思いながら学生食堂の隅っこでうどんを啜っていた。

「お、金木じゃん、隣いい？」

そう僕に問いかけたのは小学生からの友人である滝澤晶だ。

「あ、うん、大丈夫。ただそこかなり日が当たって眩しいと思うから座るなら向かいの席の方がいいよ」

「そう言われてみればたしかに。それじゃあこっちに座るわ」

そう言つてアキラは僕の向かいの席に座った。テーブルに置かれたトレイを見ると僕と同じ種類のうどんが置かれていた。そういえばアキラは昨日も一昨日もうどん食

べてたよなとか思っていたら突然晶が何か思い出したようにこちらを向いた。

「あ、そうだそうだ。これ貸してくれてありがとうとさん。読み終わったから返しとくよ、傷はつけないように気をつけてたから多分大丈夫」

そう言つてアキラがバックから取り出したのは一冊の本だった、タイトルは『塩とアヘン』高槻泉先生の著書だ。この前晶高槻作品を読んでみたいと言つてたので貸したものだ。僕はアキラから本を受け取るとバックに入れつつ感想を聞いた。

「面白かった？」

「結構面白かったよ。まあタイトルから薄々気づいてたけど明るい話ではないわコレ、悲劇のオンパレードっていうか。でも僕的にはかなりの良作だと思う、文章も読みやすかったし」

「高槻先生の作品は基本的に悲劇が多いからアキラに合うか不安だったけど面白かったなら良かったよ。塩とアヘンは高槻作品の中では比較的マイルドだからってのもあると思うけど」

そうなのだ、塩とアヘンは高槻作品の中ではかなりやさしめの作品なのだ。しかも文体もかなり読みやすく、まだ高槻作品を読んだことない人にはこれを薦めるべきとネットでは言われている。

「えーあれでマイルド？じゃあこの前お前が呼んでた黒山羊の卵とかどうなっちゃう

んだよ。しかも知ってるか？ Y a h o oで黒山羊の卵って調べると予測変換の二番目にバットエンドって出てくるんだぜ。まあ一番目は面白いだったからさぞかし面白いんだろーけどさ」

手をひらひらとさせながらアキラは言った。確かに黒山羊の卵はバットエンドだ。しかし面白い、面白いのだ。過激な残虐表現は多いけど心理描写が繊細でとても面白いのだ。作家業界の大物も絶賛してたし。

「うん、黒山羊の卵は本当に面白いよ。塩とアヘンが面白かったなら今度読んでみたら？ いつでも貸すよ」

「センキュー、この前まとめ買いたらラノベを読み終えたら借りるわ」

半開きになってるバツクの中を指差しながらアキラは言った。テーブルの上に置かれたバツクの中には美麗なイラストが表紙を飾るライトノベルが二冊と学者が出してそうな到底アキラの興味を惹きそうにない本が一冊入っていた。アキラがライトノベルを好きなのは僕とヒデの間では周知の事実だ、高校生の頃に色々とおすすめされたのを覚えてる。ちなみにヒデというのは僕と同じ上井大学の一年で親友だ。だが性格は僕とは違い文化祭などのイベントにも積極的、友達も多く活発で明るい性格だ。水を飲みながらそんなことを考えてるとそういえば晶ってライトノベルのとあるジャンルが好きだったよなあということを出す。

「ライトノベルといえば……なんだっけアキラの好きなジャンル、確か……セカイ系?」

その言葉を聞いたアキラはうどんを啜る手を止め、ハンカチで汁のついた手を拭くとバツクの中のライトノベルを手に取るとセカイ系について語り始めた。

「そのとーりセカイ系は最高なのさ、最高のボーイミーツガール、小難しい社会情勢もリアリティもいらぬ。異世界で、学園で、深い森の中で、田舎町で、戦場で、崩壊した世界で、『ぼく』と『きみ』は出会う。主人公とヒロインは出会うんだ。そこで繰り広げられるセカイを巻き込んだ物語は最高だ。というわけでハイこれ。昨日セカイ系……というカラノベが読んでみたいっていったらだろ?」

そういつてアキラは手に持ってた本を僕に手渡した。受け取りながら僕は昨日のことを思い出していた。たまたま見たテレビのニュース番組の特集、確か内容は若者に浸透するサブカルチャー文化。その中でも特にライトノベルを題材とした特集で、そこでセカイ系というジャンルが取り上げられていた。そこで『そういえばセカイ系のラノベだったらアキラが色々持ってたよな』と思い読んでみたくなったので晶に貸してくれと頼んだんだ

「ありがとうアキラ……ちようど今日の朝黒山羊の卵を読み終えたところだったんだ」
「感謝しろよ、ラノベ初心者にも読みやすくそれでいて面白いのを持ってきたんだ。」

世界観としては人がいきなり花になる怪奇現象が蔓延した世界、そこで主人公は世界の秘密を握る少女と出会いとある決断を迫られる・・・といった感じだ。僕的には主人公の・・・おっとこれ以上はネタバレになるな」

ケラケラと笑いながらアキラは言った。受け取った本のあらすじを読むと確かにそんなことが書いてあった。漫画みたいならあらすじだなと思いつつ僕はさつきから気になつてたことを聞いた。

「話変わるけど・・・そのバックに入つてる自己啓発書みたいなやつ何？アキラつてそういうの読むわけ？」

するとアキラはバックからある本を取り出して僕に見せた。題名は亜人の正体とは。「ひと昔前に話題になつたやつ、まだ半分しか読んでないけどくっだらな妄想だよ。しかも社会的地位がある教授が書いてるんだからタチが悪い」

アキラの言葉には熱がこもっていた。亜人・・・最初の亜人が発見されてから40年が経つた今でもその正体は説明されてない。そもそも亜人とは何か？それは死なない生物である。正確には死んでも生き返る生物だ。最初の亜人は今から40年ほど前にとある戦場で発見された。何度殺しても何度殺しても撃ち殺しても生き返る人の姿をした生物、そんな生物の発見に社会は混乱した。その時僕はまだ生まれていなかったから詳しくは知らないけど連日ワイドショーでは亜人についての議論がなされたという、

果たして亜人は人間なのか、人権は適応されるのかなどなど e x e . . . 。そこから10年の年月をかけてアメリカでは亜人に関する法律がつくられた。要約すると亜人は人間ではない、その研究と危険性のため亜人は国家の管理下にあるべきであると。しかし非人道的な実験は禁止すると（これはその当時発見された亜人がそれなりの著名人で人気者だったため、デモが起こったことも関係している）、そして国家の研究所で暮らすべきと。そして全世界で亜人に関する同じような法律が作られ適応された。だが亜人の数は少ない。今まで日本で発見された亜人は三人だ、たったの三人。

「亜人．．．そういえばくだらない話なんだけどアキラって結局のところどう思う？」
「どうって．．．何が？」

「数年前に話題になったあの陰謀論についてだよ、テレビでは色々の特集が組まれたけど．．．結局あったのかな？」

数年前に話題になった陰謀論、政府が亜人に対して非人道的な人体実験が行われてるという噂だ。ネット上ではそれを裏付ける証拠として2年前の亜人脱走事件が挙げられる。日本の研究所で暮らす亜人が逃亡したという事件だ。非人道的な実験が行われていないなら亜人が逃げる必要はないと。

「まあどうだっていいけどあえていうのなら僕は非人道的な実験はあったと思うよ。そもそも日本政府とかいう腐りきった組織が死んでも生き返るモルモットを手に入れ

てまともな実験で済ますはずがない。死んでも生き返る、つまり不死つてことだ。不死なんて代物だれもが欲しがる、お偉いさんはもつと欲しがる。まあそんな感じさ」

「でも亜人つて寿命には逆らえないんじゃないやなかつたつけ、永遠の命ならまだわかるけど……そんなに欲しいものかな、亜人の力。人が死ぬ機会なんて人生でそうそうあるもんじゃないし……?」

「そうじゃないんだよね、金木。この現代社会に突如現れた不死性を持つ生物、老人共ならもしかしたら寿命も解決できるかもしれない、人間もその恩恵を受けられるかもしれないと思つて一縷の望みに縋るのは全然ありうる話だ。しかもとあるアメリカの研究所によると亜人の構造は人間と変わらないという実験結果が出ている。そうなれば別に不死性の研究以外にも色々あるんだぜ、超危険な薬の実験だったりな。ま、全ては都市伝説、ホントでも嘘でも僕らには関係ねーよ。でも、それでもだ。ネットで亜人はヒトじゃないから非人道的な実験とか別にいいじゃんとか言つてる連中を見ると腹たつけどよ」

訳知り顔でアキラは語る。アキラは亜人についてかなり詳しい。大学に入つてからすぐに亜人研究サークルというものに入ったらしいし元々亜人にかんがりの興味があるのかも知れない。そのサークルは三日で抜けたらしいけど。その時の晶はめちやくちや不機嫌だった、『なーにが亜人研究サークルだ、あのクソ偏見野郎共』とか言つて

たし。

「あ、そういうえば明日だろ？本屋デート、しかも相手はメガネ美人」

本屋デート。そう、この僕金木研は先日あんでいくという喫茶店で知り合った神代利世という女性と明日おすすめの本を教えあうことになったのだ。きつかけは高槻先生の本、黒山羊の卵。

「そう、夢の本屋デート……！そのメガネの女性は神代利世さんって言うんだけど……正直今でも信じられないよ、こんなことがあつていいのかつて」

「ホンットそれ、だつて考えてみろよ。最初の頃なんて神代さんを見るためにあんでいくに通いつめてさ、よく通報されなかつたよな。ま、でもなんやかんやで同じ本好きという趣味を持つ美人と知り合えたことは多分金木の人生最大の幸運だろーな」

別に付き合つてる訳じゃないからデートじゃないけどな、とも言つてアキラは笑つた。確かに今考えてみれば僕の行動つてなかなか気持ち悪かつたと思つてゐる。ヒデにも妄想男と言われたし。それに付き合つてる訳じゃないからデートじゃない。確かにそうかもしれない。でも確か正確には付き合つてなくてもデートと呼ぶこともあるらしい……多分。

「人生最大の幸運は言い過ぎだと思ふけど……確かにそうかも」

若干卑屈になりながら僕は答える。話してゐる間にお互いうどんを食べ終わったの

でトレイを片付けないつつ食堂を出る。

「じゃあ僕は次東洋史の講義だから……」

「おう、じゃあな。明日の本屋デート楽しんでこいよ。金木がデート……厳密にはデートじゃないけど僕以外の女と外出するなんてそうそうないことだからな。あ、僕もうバイトの時間だからじゃあな」

アキラは時計盤を見るとそう言いながら歩いていった。確かに僕はアキラ以外の女の子と外出したことなどない。そしてアキラは女の子というにはあまりにも価値観があまりにも吹っ飛んで……いや女性の常識的な価値観とかわからないけど、ただただ一つ言えるのは世の中の女性の一般的な常識はアキラには全く当てはまらないだろうということだ。そんなことを考えながら東洋史の講義に向かう僕の耳にはアキラの独り言は聞こえなかった。

「神代利世………利世………リゼ………どつかで聞いたことあるんだけどな……気のせいかな」

この時アキラが思い出していればまた未来は別だったかもしれない。ああ、きつとそうだ。

あ、あと本当にどうでもいいことなんだけどアキラから変な匂いがしたんだ。花火の

火薬みたいな匂い。

大学の講義を終えて家に帰りベットにねっころがった。途中コンビニで売ってたあんパンを食べながらテレビを見る。しかし頭の中を駆け巡るのは明日のデートのことだけだ。明日どんな服を着ていこうかとか、どんな本の話をしようかとか。あんパンを食べ終えるとアキラからメールが届いていた。内容はデートのアドバイスだった。要予約すると『僕もデートとかしたことはないからあんま言えないけどとりあえず清潔な格好をして、相手の胸を見たりしないように』といった旨のことが書かれてあった。足かに清潔さは大事だろう・・・でも実際清潔さってなんだだろう？髪を整えるとかかな？

『白神通りで起きた同様の事件について・・・喰種専門家の小倉先生にお越しいただきました』

ふと顔をあげるとテレビでは喰種についての特集が組まれていた。喰種・・・ヒトを

喰う化け物の名前だ。ヒトに化けて生活してるっていうけど僕は今まで一度も見たことない。ホントにいるんだろうか・・・いるんだろうな。だんだん眠くなってきたのでシャワーを浴びて眠ることにした。

・・・太宰治は斜陽でこう書いていた『私は確信したい、人間は恋と革命のために生まれてきたのだ』と。僕もそうであると思いたい。そんなことを考えながら明日への期待を込めて眠りについた。

「ーリゼさん A B 型なんですか？ 僕もなんですよ」

本屋デートは成功に終わった。最初にデパートの中の本屋でおすすめの本を教え合ったあと昼ごはんを食べて本屋に行ってそしてもう夜。デート終了、辺りは暗くなってきた。街頭が照らす道を神代さんと一緒に歩く。途中まで帰り道が一緒だからだ。

「本当ですか？ 奇遇ですねっ。読書の傾向もそうだし年齢も同じだし・・・私たちって結構共通点多いですね」

ふふっつと笑いながらリゼさんはいった。その様子に思わずドキドキしてしまう。そして、これが一番重要なのだが、・・・何だかいい感じかもしれない・・・。そんな淡い感情を抱きつつ十分ほど歩くと自分の帰り道とは違う方向に進んでしまいそうになったのでそのことを伝えて帰ろうとする。

「金木さん、今日はありがとうございました」

「いいえこちらこそ楽しかったです！じゃあ僕はこつちなのでこれで・・・」

本当に今日は楽しかった、順調とは言い難かったけど、ずっとドキドキして緊張してたけど、それでも楽しかった。そして帰ろうとする僕にリゼさんは不安そうに声をかけた。

「……………あの……………この前高田ビルのちよつと先に住んでいるんですけど……………最近事件がありましたよね……………」

「あー確か喰種の」

そういえば高田ビル通りでこの前喰種事件が起こったなと思い出す。不安そうな様子のリゼさんはさらに言葉を紡いだ。

「私……………ずっとそのことが気にかかっているんです……………考えすぎて夜も眠れないくらい……………帰宅中も一人じゃ怖くて……………」

その言葉を聞いた僕は速攻で『家まで一送って行きます』といった。この時の僕は男

として好きな女性が怖がっているのだから守ってあげなくちゃとか考えていたんだ。それが地獄への片道切符とも知らずに。本当に馬鹿。

リゼさんの家まで一緒に歩きながら僕らはとりとめのない話をしていた。リゼさんにとつてはただのおしゃべりかもしれないけど僕のとつては一分一秒が幸せな時間だった。暗い夜道を歩き高架下にさしかかった時リゼさんの足が止まった。

「でも・・・不思議ですよね・・・本の趣味がきっかけでこうして金木さんと私が一緒に歩いてるなんて・・・ホント不思議」

街灯の灯りに照らされたリゼさんはとても綺麗だった。そしてリゼさんはゆっくりと僕に近づくと僕に密着した。心臓の鼓動が速くなる。ドクン、ドクンと血液が過剰に送り出される。なんでこうして、その言葉が脳内を駆け巡る。

「金木さん・・・ホントは私気づいてたんです。あんていくで私のこと見ていてくれたこと・・・金木さん、私も・・・」

リゼさんがゆっくりと言葉を紡ぐ。リゼさんの口元に視線が行ってしまう。これは・・・もしかして・・・両思いなのではないかという考えが脳内に溢れ出す。しかしその考えは一瞬で否定されることになる。

「あなたを見てたの」

「は？あ、あ、うわああああ！！？」

瞬間、肩に激痛が走る。慌てて見ると・・・なんでどうして、リゼさんが僕の肩を噛んでいた。なんだ？なんだ？なんなんだ！！？なんだあの目は、赫く染まつたリゼさんの両目は！痛みでみつともなく地面に倒れる。大声を出してしまう。いや、違う恐怖だ。未知のものに対する恐怖だ、常識外のものに対する恐怖だ。

「はあああおいし。あらっ大丈夫ですか・・・ウフフフフ」

さつきまでは綺麗だったその微笑みが今はもうわけのわからないものにしか見ええない。というか何だ、この状況は何だ、意味がわからないよ、なんで、なんで。

「ねえ金木さん、私・・・黒山羊の卵でとっても好きなシーンがあるんです」

カツカツと僕の方に彼女は近づいてくる。束ねていた髪をロングにしてメガネを外し、口元の血を舐めながら、嗤いながら彼女はこう言うんだ。

「殺人鬼が逃げ惑う男の臓物をゼーんぶ引き出しちやうところ・・・私、あの部分ツツ回読んでもゾクゾクしちやうの」

ガタガタと体が震える。眼前に迫った命の危機に、訳の分からない状況を前に。未だ現状を飲み込めていない僕はただ震えることしか出来なかつた。おそらく今の僕はとんでも無くみつともない表情を浮かべているだろう。怖い。

た。立ち上がったって逃げた。怯んだ一瞬での好きに逃げた。怯んだかどうかもわからないが逃げた、ただ逃げた。

全力で逃げた。そして逃げる中で自分の愚かさを悔いていた。僕は馬鹿なんだ、．．．今思えば最初のアんていく脳内時も休日遊びに誘ってくれたのも、全部彼女の計算だったんだと。でも今そんなことを考えている暇はない。ただ全力で逃げなければいけない。もう頭の中にはそれしかなかった。瞬間、激痛が走る、脇腹、なんだ？貫かれたのか．．．？意識が曖昧になりそして壁に叩きつけられたかのような衝撃が走る。もう何が何だかわからない、視界もぼやけてきた。痛みだけがあった。もう何も考えられなかった。

「あら死んじやった？ウフフ．．．私力ネキさんみたいな体型の人大好きよ。程よく油も乗ってるし、筋肉質じゃないから柔らかくて食べやすそう．．．今週食べた二人とどっちが美味しいかしら．．．あら？」

そして大きな音が響いた。最後に見たのは落ちてきた鉄骨におし潰された彼女と．．．

とある武器商人

夜の街にザアザアと雨が降る、予報では曇りだったはずだが。どうやら天気予報は外れたらしい、いきなり降ってきた雨を防ぐために近くのコンビニでビニール傘を買う。表通りから裏道にそれ薄暗い道を進み、階段を降りる。ビニール傘を畳んでまとめると僕、滝澤晶は地下一階に位置するさびれたバーへと足を踏み入れた。店内は薄暗く、客はいない。いるのはカウンターに立つ男性一人だけだ、ちようどいいと思いつつその男性に声をかける。

「よおマスター、用意できてる？」

このバーのマスターは見た目四十代のオッサン、腕には入れ墨が彫つてある。いや、入れ墨というよりはタトゥーか。極道ものというよりはアメリカンギャングのような感じがする。入れ墨とタトゥーの違いなんてまったくといっていいほどわからないが。

「当たり前だ、金は前払いで受け取つてんだ。用意できませんでしたじゃ信用に関わる。取ってくるから少し待てる」

マスターはそう言うのと店の奥に入つていった、武器売買なんていう仕事だ、そりや信用は大事だと思ひながらカウンターの椅子に腰掛ける。五分ほど経つた時、マスターが

注文の品を持って戻ってきた。

「外は雨か」

雨に濡れた僕とビニール傘を見ながらマスターはそうつぶやいた、ここは地下で窓がないから外の天気かわからないのだろうか。

「ああ、天気予報では曇りだったんだけどさ。あいにくの急な土砂降り、嫌になるよホント」

「そいつは災難だったな。まあそれはともかくコイツが注文の品だ。拳銃が二丁、S & W M 29とワルサー P P S。弾薬はどちらも Q バレット式、44 マグナム弾と 9 m m パラベラム弾。中国産だが品質は保証しておく」

S & W M 29 は 44 マグナム弾を使用する大型の拳銃だ、反動が大きいリボルバー式。使用する弾薬は 44 マグナム弾だ。ワルサー P P S、こいつは持ち運びしやすいコンパクトサイズの拳銃で反動も少ない、普段携帯するならこちらの方がいいだろう。どちらも弾薬は Q バレット式、つまりは溶かした赫子を練り込んだものだ。値段は通常のものよりかなり高い。手にとって感触を確かめる、構えてみたりもする。・・・中国製か。民間に喰種殺して Q バレット作るやつがいるのか?・・・いそうだな、中国だしな。そうじゃなきや中国喰種対策局が横流ししてることになっちまう。案外それもありうるか?・・・まあどつちでもいいか。僕は Q バレットが手に入るなら別にいい。

「最高だ。あ、そういうえばマスター。ジップロック的なのはある？この雨じゃ弾薬が濡れちゃうし」

「ジップロックか・・・多分あったと思うぞ、持ってくるから弾薬の数でも数えとけ」
「はいはい」

店の奥へ行くマスターを横目に弾薬を数える。9mmパラベラム弾と44マグナム弾、注文通りの個数だ。しかしQバレットなんてよく取り扱ってたな、マスターは。案外極道の組長とかが護身用に注文したりするものだろうか。僕はそこまで裏社会に詳しいわけじゃないからな、そこら辺は分かりやしない。

「あつたぞ、ジップロック。弾薬詰めとけ」

戻ってきたマスターが僕にジップロックを渡した。カートリッジと弾薬、あと拳銃をジップロックに詰める。

「・・・客の素性を詮索するつもりはない、だから別に答えなくてもいいんだが・・・Qバレットなんてもんだうするつもりだ？殺したい喰種でもいるのか？」

「そんなんないよ。ワルサーPPSの方は護身用さ、僕も大学生になったことだし護身用具の一つや二つ持つとかないとね」

こんなご時世いつ喰種に襲われるかわからないんだ。護身用具は必要だ、それがたとえ違法なものであっても。なぜこのような思考に至ったかというと実はつい先日喰種

に襲われたんだ。その時はなんとか切り抜けたがあれで僕はかなりの危機感を感じたってわけだ。だがその時は気をつければいいくらいのものだった。僕が護身の術を欲したのにはもう一つの理由がある。

「はっ、護身に拳銃持ち歩く大学生か！イカれてやがる。．．待てよ、ワルサーP P Sが護身用ならリボルバーの方は何に使うんだ？ S & W M 2 9なんてデカくて持ち歩けねえだろ」

「リボルバーは持ち歩き用じゃない、もしもの時用だ。ちようど高威力の中距離武器が欲しかったんだよ、クインケは持つてるんだけど形状が剣だからさ。近距離中距離両方必要だったってわけ」

昔、といっても数ヶ月前に捜査官の死骸を発見したことがある、その時にクインケを手に入れた。死骸漁って武器を手に入れるか．．懐かしいな、昔自衛隊基地でやったことがある。といっても前世の話だが。

「クインケにQバレット．．やっぱお前殺したい喰種いるだろ。百歩譲ってワルサーは護身用だとしてもクインケとリボルバーは100%自分から喰種ぶつ殺しに行つてるだろ」

「そんなことないさ。もしものためだよ。．．．．古い古い友人がこの前喰種に攫われたんだ。そんな時はクインケなしで救出に向かったけど結構ギリギリの戦いでさ、多

分クインケありでも相当キツかった、中距離からの羽赫の攻撃がクソうざかったんだ。だから中距離武器が有ればいいと思っただよね。もしもの時のために」

古い古い友人、前世からの友人。亜人の友人、あいつが僕のことを友人だと思ってるからどうかは知らないけどさ。少なくとも僕は友達だと思ってる。前世で黒い穴に飲み込まれて転生した僕たちはこの世界で再び巡り合った。2年前に。亜人研究所から脱出した後あいつは東京から離れて地方で暮らしていたんだ。そこでひと月前僕は久しぶりに顔でも見ようとそいつを尋ねたってわけだ。そしたらまさかの行方不明、探してみたら喰種にとつ捕まってたってわけだ。亜人だからな、いい食料源だったんだろう。クインケを取りに家に戻る暇もなかったから亜人に備わった復活以外の武器を使って救出したわけだ。どんな武器だつて？そいつは長くなるからまた今度だ。それで救出した後そいつはまた引越した、それでおしまい。この話は終わりだ、これが僕が護身の術を欲したもう一つの理由だ。僕も亜人だから危機感を抱いたってわけだ。・・・友人が亜人じゃなければ普通にCCGに通報したんだけどね。

「はいイカれてやるよお前。まあ銃持つてる大学生がイカれてないわけねえな」

「おいおい僕は平凡ではなくともまともな人間だぜ」

「イカれてるかイカれてないかはどうでもいい。それよりなんでCCGに助けを求めなかったんだとか色々とツツコミどころがあるんだが・・・そもそもなんでクインケな

しで喰種と戦えんだよ。もういつそのこと喰種捜査官になれよお前、きつと天職だぜ」呆れながら冗談混じりにマスターは言う。たしかに喰種捜査官は僕にはとつて天職だろう。問題は死にやすく、死んだら亜人だと露見してしまうことだ。そいつはいただけない。

「かもね。だけでももう色々と法を犯しちゃってるからさ、今更公務員にはなれないよ。というかマスタークインケ知ってたんだ。喰種のことにも詳しい感じ?」

「昔、元喰種捜査官の客がいた。そんな時に色々聞いただけさ。つと、酒も頼まないならそろそろ帰れ」

元喰種捜査官の客か、そんな奴が裏の武器商人から武器買うのか。元公務員が武器を買うのか。世も末だななんてことを思いつつ片付けを始める。ジップロックを持ってきたバックに詰める作業だ。ちなみに僕は成人するまで酒は飲む気がない、銃刀法違反の百倍ばれやすいんだ、飲酒つてのは。

「未成年だし酒は飲まないことにしてる、つーわけでそろそろ帰るとするよ。せいぜい喰種と警察に気をつけてけな。こんな未成年の大学生に武器売ってくれんのなんてこころじゃあんたくらいだからな。海外ルート持つてんのも。死なれても捕まっても困る」

「そいつはどうも、今後も臍盾にしてくれよ」

「弾薬が切れたらまた来るさ。それか成人したらだな、そんなときやカクテルでも飲みにくるよ」

ジップロックをバックに入れ終えた後ドアを開けて店を出る、階段を登り地上に出る。そしてビニール傘を開こうとしてあることに気づく。

「・・・雨、止んだな」

ジップロックに包んだのが無駄になったと思いつつ時計を見るともう夜の11時を過ぎていた。そういえば今日は金木がデートする日だと思いつく、11時ならもう終わってるかと思いつつデートの感想を聞こうと携帯を取り出す、金木に電話をかけるがでない、もう一度かけてもでない。11時なんて普通の大学生なら起きている時間だが。何かあったのだろうか、思い切つて告白して振られて失恋ショックで寝込んでいるのだろうか。そんなことを考えながら電車に乗り二十区に帰る。

そのまま家に帰りビニール傘を玄関に置いてベットに寝転がる。バックからリボルバーを取り出してカチャカチャと弄りつつテレビを見る。ニュースでは今日も喰種事件の特集だ。喰種専門家の小倉とかいう奴が胡散臭い言葉を並び立てている。三十分ほどダラダラしたところでテレビを消し眠りにつく。金木の入院を知ったのは翌日のことだ。

